

無神論論争から神秘主義へ

——三宅剛一のフィヒテ批判

玉 田 龍太郎

はじめに

三宅剛一（一八九五—一九八二年）は『ドイツ観念論に於ける人間存在の把握』（一九四二年、以下『把握』）において、フィヒテ（一七六二—一八一四年）がどのように「人間存在

の意味」（『把握』十三頁）を究明したかを考察する際に、彼の思想上の「転機」（『把握』五八頁）となった通俗的著作「人間の使命」（一八〇〇年、以下『使命』）（①の分析を重視した。カントの『実践理性批判』（②）に触れて「哲学的使命」を自覚したフィヒテは、彼のいう道徳的实践を通して「人間の自主、自由」と「睿智的世界の实在性」に関する認識を把握し、カントが切り開いた新世界を独自の仕方によって捉え返して、「人間の使命」を人間存在の意味として明確にすることを哲学的課題とした（『把握』十三頁）。後に三宅は自らの実践哲学の名著『道徳の哲学』（一九六九年）においても『使命』

に注目し、「良心の声は、各人にその特有な義務を課するが、その声はわれわれを無限者につなぐ *Straf* 「光線」であって、この光線をつたって、無限なるものからわれわれが出てきて、個別な存在者としてそこにおかれる」（③）の言葉を取り上げている（『把握』六七頁）。

三宅は『使命』執筆の動機として、フィヒテがイエーナからベルリンへと赴く原因となった「無神論論争（*Atheismusstreit*）」に注目する。一七九八年『哲学雑誌』（*Philosophisches Journal*）掲載のフォルベルク（一七七〇—一八四八年）による無神論的論文「宗教概念の発展について」（④）の内容擁護の意図から、フィヒテは神を道徳的世界秩序とする論文「神の世界統治における我々の信仰の根拠について」（⑤）（以下「信仰の根拠」）を同時掲載したが、結果フィヒテは翌年イエーナ大学を去ることとなった（『把握』五八頁）。三宅によると、フィヒテの「イエーナ時代」（⑥）の哲学が「人間の道徳的存在

を中心」にしていたのに対し、「ベルリン時代」の哲学は「宗教的存在の問題を中心」にし、この両者の境は『使命』の内にある〔把握〕十四頁〕が、この無神論論争の経験からフィヒテは「宗教への深い内省」〔把握〕五八頁〕へと導かれており、前者では「宗教を道徳に基づける」のに対して、後者では「宗教的生を基として道徳を考えている」〔把握〕一五五頁〕。既に無神論論争期にフィヒテ自身は「真の無神論」とは、自分の行為に「好結果を見込める」までは「良心の声に従わず」に「自分自身の忠告を神の忠告よりも上に置き、自分自身を神たらしめることにある」(GA I/5, 354)としたが、一七九九年にベルリンに移った後、F. シュレーゲル(一七七二―一八二九年)を通じたロマンティカーとの交流の中で宗教への内省を促され、彼に思想上の転機が準備された。こうして一八〇〇年の『使命』は彼の「後期の思想の発酵の状態」を示すと同時に、それは前者と比較して後者が「著しく宗教的神秘主義」〔把握〕五八頁〕となるきっかけをつくったのである。

三宅はこのフィヒテの思想転回に最大の影響を与えたのは、『Idealismus ist Nihilismus』〔把握〕六四頁〕であるとしたヤコービ(一七四三―一八一九年)によるフィヒテ哲学への批判であるとみる。そこで本稿では三宅によるヤコービとフィヒテの哲学の比較分析から、『使命』を執筆するに至ったフィヒテの思索をカントが「人間における内的法廷の意識(Das Bewußtsein eines inneren Gerichtshofes im Menschen)」および「その行為のゆえに神の前に果たすべき責任の主観的原

理」として考えた「良心(Gewissen)」(7)の概念とともに考察したい。

一 三宅によるフィヒテ哲学の二側面からの区分

三宅によると、イェーナ時代のフィヒテ哲学においては「実践的努力の目標」として「絶対的自由」が根本にあり、道徳的实践を通した「その実現に近づくべき理想としての無限者の理念」という見地が強調されたが、ベルリン時代は「精神的生の源泉或いは根源」として「絶対者の考え」が根本にあるため、「絶対者の根源的生」を通した「現世をこえた永遠に参入合一する」という見地が強調された(『把握〕五八頁〕(8)。三宅は、前者の中心問題は「自我に於ける有限と無限との関係」であり、ここに次の二つの局面をみる。一つは無限な自我の「自己制限」による「主観客観の対立する有限な現実意識の成立に関する」局面であるが、この局面で課題とされている知識学の「先験的演繹の主題」(9)は「意識成立の制約」である。もう一つは有限な自我の「実践的活動」による「絶対自由な自我に近づく」局面であるが、「理念としての自我」(10)に現実の人間は到達することができないので、この「理想を目ざして進むところに人間の使命(Bestimmung)」がある。三宅によると、この人間の「実践的理想と可能性からみると人間存在に関するフィヒテの Idealismus が存する」のであり、イェーナ時代においては「人間の個人性はただ人間の有限性に伴う免れがたい制限」として「ただ超克さるべきものとして消極的」にみられるに

すぎない。それゆえイエーナ時代の見地は、「客観の自然界の存在」を単に人間の「道徳的な行為の素材」として捉えるだけの立場、即ち「ただ一般的理性的なものにのみ価値をおき、個別的なものをただ偶然的なものとする啓蒙的合理主義の立場」である。三宅はここにイエーナ時代のフィヒテ哲学の課題を見出し、「人間のうちに無限に近づこうとする Trieb [衝動] - unendlicher Trieb を認める」考え方は「啓蒙主義的な個と一般との関係に入りきらないもので、それはすでに Romantik の考え方である」が、フィヒテは「ただ個性を個性として根源性を認めるのではない」ので、この個性は「理性的ということとを離れない」とする（『把握』六〇―二頁）⁽¹¹⁾。

更に、晩年に至るまでフィヒテが学者の果たすべき役割を強調した⁽¹²⁾ように、彼が通俗的著作・講演と学問的論述とを区別する側面にも注意を要する。三宅によると、前者は「人間の自然的な真理感覚に訴える」が、後者は真理を「精神のうちに生成産出」させるものであり、両者の区別は「faktische Evidenz [事実に証明]」によるか「genetische Evidenz [発生的証明]」によるかという点にある⁽¹³⁾。三宅はこの区別にフィヒテ哲学の「理想主義的」側面と「先験的論理的」側面とをみては（『把握』五九頁）、『使命』は前者に関わるとする⁽¹⁴⁾。フィヒテは「イエーナ期の終り頃」すでに『新しい方法による知識学』⁽¹⁵⁾において、「人間の超感性的本質たる意志」に「個的限制性」ないし「睿智的な個性」を考え、「人間の個別性」における「当為的な課題」を「個別化の原理」と捉えたが、三宅はフィヒテが二通のシェリング宛書簡、即ち一八〇〇年

十二月二七日付の書簡（GA III/4, 406-7）⁽¹⁶⁾、一八〇一年五月三一日付の書簡（GA III/5, 43-52）において、知識学に「睿智的世界の超越論的体系」（GA III/4, 406）とその「完成（Vollendung）」（GA III/5, 45）の欠如を認めたことに注目して、知識学においては「まだ個の組織ある全体としての Geisteswelt [精神世界]」がはっきりと考えられていない」（『把握』六二頁）とし、精神世界の統合という「最高の統合」が未達成であることをフィヒテが自認するという。そして、たしかに『使命』においても睿智的な精神世界と個人の問題が究明されようとはしているが、それは基礎づけのない主張にとどまると批判する。フィヒテは『使命』を「疑（Zweifel）」[知（Wissen）]「信（Glaube）」の三章から展開して、とくに知と信とを対照し、知が単に「像（Bilder）」を与えるにすぎないのに対して、信、即ち「良心の声」は「我々に実在を示す」とした。この良心が個別的に当為を示し、個人を「超感性的な世界につなぐ」のであり、この良心の声に応じる仕方では個人は「何等感性的なものに影響せられない純粹に理性的なる意志によって純精神的な Ordnung [秩序] に属する」のである。有限者は単に「理性世界（Vernunftwelt）そのもの」のうちに生きるだけでなく、同時に「感性的秩序」のうちに生きるのが必然的であるので、「有限者の意志は理性活動と同時に何等かの物質的世界での目的をもつ」。三宅は「この物質的世界の動きを支配する法則は自然法則であるが、精神的世界を支配する法則は何であるか」と問い、ヤコビーが自らの学問的論述である知識学に与えた批判に、フィヒテは

通俗的著作の『使命』で応答しようとする仕方、この問題に「一つの見方」を示唆したとする（『把握』六二―三頁）。

二 『使命』におけるフィヒテのヤコービへの応答

さて三宅の注記によると、ヤコービによるフィヒテの知識学への批判とは、知識学は「すべてのものを自我のうちにとり入れ、自我の構成しうるもののみを認める純内在論」とみるものであり、ヤコービは知識学の立場を「自我の外なるものに対してはニヒリズム」であると見做した（『把握』一五五頁）。三宅は一七九九年三月のヤコービの『フィヒテ宛公開書簡』（18）におけるフィヒテ哲学への批判を、次のように整理する（『把握』六二―四頁）。即ち、知識学はあらゆるもの「真理」の「根拠」を示すことを目指すが、しかし「真なるものそのもの」が「その外にある」ので、この真なるものの認識不可能性を学の本質とする。知識学は「すべてを自己の中にのみ与えられるとする全くの内在哲学」であるので、「純粹理性」は「ただ自己のつくり出したものだけを認める」ものとなり、「哲学する精神」は「自己に対しても自己をつくり出す」こととなる「自らの造物主」であって、自我は事物の「すべてを自己にとり入れ」て「無化する」ことによって、「自己を自由に制限する構想力」から事物を「再生産する」ものである⁽¹⁹⁾。ヤコービは、知識学を「ただ自己自身をもてあそぶ空虚な Spiel「遊戯」」にすぎず、その立場は「Realität「実在性」」に関する Nihilismus」であり、真なるものは「知によって達せられない」⁽²⁰⁾とする。これに対して、ヤコー

ビの立場は「人間は真なるものについての彼の無知」の「感情」と「意識」、換言すると「真なるものの Ahnung「予感」」を抱くことができるだけであるというものであり、「人間の理性の終局的解答」は自我ではなく「神」なのであって、この「実在する真なるものは知られるのではなく感ぜられる」のである。こうしてヤコービは、「無神論」や「神秘主義」という非難が時代を超えてつねに哲学に投げかけられるのは、哲学が不遜にも「自らを精神でもって自然を超えて高めようとか、自らが自然である限りの自分自身を超えて高めようとかいう気持ち」に人を誘おうとするからであるという（GA III/3, 249）。

このヤコービによる批判に、フィヒテはどう応答したか。三宅によると、フィヒテは『使命』において「個人及び個人の共同体というものの」根拠を哲学的に究明しようとするが、それは深い考察までは立ち入らない「哲学的 Meditation「瞑想」」にすぎない（『把握』六五頁）。実際フィヒテは「知によって、そして知から生じるものは単に知にすぎない。しかし、あらゆる知は模写にすぎず、知においては常に像に対応するものが要求される。この要求は如何なる知によっても満足させられない」（GA IV/6, 252）として、知に関して「純粹な思弁の体系が実在に関する虚無主義に導くと云ったヤコービの言葉を裏書きする」考えを認めているようにみえる。ここにおいて知は「実は単なる表象、或は表象的意識」、「単なる映像（Bilder）」にすぎず⁽²¹⁾、「反省」も「存在の支点」というものには達しない「無限遡行に陥る。それゆえ「私のうちに何

か絶対に確かなものがあるか」と問うには知から信へと立場を移行する必要がある、その立場は「何事かが為さるべきだ」ということを絶対的に私に告げるところの意識、「良心の声」、ないし「実在を与えるものは意志の決意と決意に基づく信」の立場ということになる（『把握』六五―六六頁）。三宅は、信が実在性を捉える「機構（Organisation）」、「知の根拠」であると注記する（『把握』一五六頁）。この「良心の声」という思想は「カント以来の実践理性の優位の考え」に沿ったものであり、フィヒテは「良心の声に従う私の意志の決定は行動として現われ、感覚的世界にある結果を引き起す」として、「意志を必ず行動と結びつけて考え」ていく。この思想は『使命』において「良心に従う意志は行動の生起及びその結果如何に拘らず決意そのものとして重要な意味をもつ」とされ、ここにおいて更に「実践倫理的から倫理宗教的立場へ」の移行がみられる。「良心の声は私に対して感覚を越えた精神の世界（der Reich der Geister）を開示し私は良心の声に従う決意によってこの超感性的世界の一員となる」といえ、良心が私を精神世界につなぐ「紐帯（Band）」の役割を果たす。三宅はフィヒテの「私の生のいかなる状況（Lage）」において、私がそこでなすべきことを私に教えてくれる、私の内奥における良心の声は、それによって今度は彼（Er）が私に対して影響を及ぼしてくる（GA I/6, 292）との言葉を念頭に置いて、「私は私の生の特殊性の下に於いて自らの果すべき使命を通じて超感性的世界につながる」のであるとする（『把握』六六頁）。

三宅によると、ここには「私は、私の意志がその感性的世界のうちに生ずる結果が何にかかわらず、意志そのものとして超感性的世界に何かの結果を生ずることを信じる」との確信がある。フィヒテのいう良心の声には「自己活動的理性」としての意志があり、この意志が精神世界を支配する「法則」であり「生命原理」であって、良心の声が「私の意志と類似性を持つ無限なる意志」によって聞き知られるところとなつて、無限なる意志を通して他の精神世界に働きかけることによって、自我は「同時に二つの世界に属する」といえる。このフィヒテの考えは既に『新しい方法による知識学』にあるが、そこにおいては「私は意志を通して叡智の世界に属する」と考えられているが、「intelligible Welt そのものの統一とそれの個人的意志への関係は不明」なままであった。これが『使命』において、「無限なる意志を原理とする精神的世界と個人的意志との交通の可能」が考察され、「良心の声を通してその無限なる意志が私に働きかけ、私は意志決定によってかの意志に働きかける」ものとされる。こうして『使命』において、良心の声が光線として照射して「私の Persönlichkeit 「人格性」の限界」を画すとされ、これが「我々の真の Urbestandteil」「一切の生の根拠で素材」である（GA I/6, 293）とされるのである（『把握』六七頁）。

おわりに

三宅によると、フィヒテにおいて超感性的世界は多くの個々の意志の体系として「一つの世界」を形成しており、「異

なる個人が相互に自由なる主体として認識することの可能も、この両者を結びつける「無限なる意志の媒介」に基礎づけられる。もちろん一方で「感覚界の変化の原因は機械的」なので、「その原因の系列をたどっていつて自由なる精神的主体に出くわすことはあり得ない」が、他方で「我々はただ共通の *geistige Quelle* 「精神的源泉」を通してのみお互いを知り、またお互いに働きかける」(GA I/6, 294) のであり、「良心の声によって *Geistwelt* が私に開かれているときにのみ私は他人を独立にして自由なる者として存在することを認めることができる」(vgl. GA I/6, 295) のである。この「使命」におけるフィヒテの思想とライプニッツの『モノドロジー (Monadologie)』とを比較して考察を加えているところに、三宅の分析の特色がある(『把握』六八頁)。モノドはモノド相互間の「調和」を考えるだけであり、モノドには「無限なる意志に当るもの」がない。フィヒテが無限なる意志を考えるのは「一つの飛躍」であつて、それはむしろ「ライプニッツの創造者の考えと同一」である²²⁾。三宅は、カント哲学に打ち込む以前のフィヒテがライプニッツの思想に近い「一種の決定論」を信じていた(『把握』一五二頁)と指摘し、当時の彼はこの決定論の考え方と「キリスト教の神」に必ずすべき心情の要求との相克に悩んでいたという。このフィヒテの思弁と心情の葛藤は一七九〇年の哲学的断片「宗教と理神論についての箴言」(23)に現れており(『把握』十二頁)、ここにおいてはフィヒテの理神論へと向かう態度が明確である(GA III, 287-291)。三宅は、フィヒテは「ただ活動する

ことに於いてのみ生きがいを感じる行動人」として「情的に決定論に服しかねた」のである(『把握』一五二―三頁)とする。

三宅は、若き日のフィヒテにとってカント哲学との邂逅は「真に精神的な更生」(『把握』十三頁)を意味するものであったが、『使命』においてはヤコビーによる批判に応じる仕方での結局のところ「精神的世界に於ける統一のあり方或いはその全体性のあり方の問題に逢着して」しまつており、「無限なる意志」を持ち出しても「問題を思想的に解決することにはならない」と批判する。フィヒテも認めるように、無限なる意志の「本性」あるいは精神世界の「実体」は「知的理解を絶する」ので、「私が自らを精神的世界の一員として自覚」し、「私を含む秩序の存在、即ち私をその中にとり入れる一つの組織ある全体を自覚」しても、「有限なる我々は無限なる意志そのものがそれ自身として何であるかを知らない」ことになる(『把握』六八―九頁)。フィヒテは、無限なる意志の「我々への関係は *solus* 「当為」の意識を通して明かに示されて」おり、私は「多数の理性的存在者の系列の中に於ける私の使命」を認識できるというが、三宅は、フィヒテが「いかにして私が私の部分において精神的世界の秩序に、或いは無限なる意志にくみ入れられるか」(GA I/6, 292) は「見えざる世界の大きな秘密」(GA I/6, 293) であるという箇所を踏まえて、やはり「wie 「いかにして」は解らない」と注意を促して、この秘密を「無限なる意志というような宗教的な思想に結びつけることによってこの問題の哲学的展開を打ち切ってい

る」点に『使命』の限界をみて、ここにフィヒテの思想が神秘主義となるきっかけを考えるわけである。

「個人と絶対との関係の問題は無限なる意志、精神の世界及び道徳的意志としての個人の連関に於て考えられているが、それはフィヒテ自身認める如く単なる示唆(Winke)に止まって問題の哲学的解決ではない。」(『把握』七〇頁)

美濃部氏は「超感性的なものの实在性を信じそれを意志することによって感性的秩序から自由になるとき、我々には「一つの新しい世界」(GA IV, 278) が实在性をもつものとして現われる。それによって、我々は自己と自己の知の实在性を確信し、ニヒリズムから脱却することができ、と「人間の使命」のフィヒテは考えている」⁽²⁴⁾としながらも、やはり「良心の声の確実さの根拠の叙述は不十分」であり、良心の声もまた「我々を欺く単なる像にすぎないのではないか」⁽²⁵⁾との疑念が残るとして、三宅と同様の見方をとっている。

三宅の『把握』の分析は更にフィヒテの後期思想の徹底した吟味へと移行することになるが、『使命』の内容をもつて結果フィヒテの哲学的な思索が無神論を契機として神秘主義へと陥ってしまったといえるのかどうか⁽²⁶⁾、この検証については稿を改めたい⁽²⁷⁾。

【註】

フィヒテの引用は I. H. Fichte 版全集とアカデミー版全集を用い、頁数は SW/GA の略号と共にそれぞれ本文中に記した。カントの引用頁数についても、慣例に倣った。

(1) Fichte, J. G.: *Die Bestimmung des Menschen*, 1800, Ⅱの「通俗的」の意味は読者対象のこと (GA IV, 189) であり、内容的にはむしろ彼の哲学の「深化発展」である。『フィヒテ全集』第十一巻、哲書房、二〇一〇年、五六五頁の訳注を参照。

(2) Kant, I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788.

(3) 三宅剛一『道徳の哲学』岩波書店、一九六九年、一二三～四頁。なお本稿は、三宅とフィヒテの思想を比較考察した次の論稿の続きである。玉田龍太郎「三宅剛一の人間存在論とフィヒテの道徳衝動論」、『比較思想研究』第四八号、比較思想学会、二〇二二年、六八～七五頁を参照。

(4) Forberg, F. K.: *Über die Entwicklung des Begriffs Religion*, 1798.

(5) Fichte, J. G.: *Über den Grund unseres Glaubens an eine göttliche Weltregierung*, 1798.

(6) 三宅はドイツの都市「イエーナ (Jena)」を「イエナ」と表記しているが、現代の日本では「イエーナ」との長音表記が一般的であり、日本語版フィヒテ全集 (哲書房刊) もこれを採用していることから、本文と引用とで表記を区別した。

(7) Kant, I.: *Metaphysik der Sitten*, 1797, AA VI, 438f. なおフィヒテのイエーナ期哲学における良心の概念については、佐々木達彦「フィヒテ初期道徳論における良心」、『倫理学研究』第四十七号、関西倫理学会、二〇一七年、一二二～一二三頁を参照。

(8) 三宅は、後の『芸術論の試み』(岩波書店、一九七三年)においては「イエナ時代には、道徳的・実践的活動を通して限りなくその実現に近づくべき理念であった無限者が、ペルリン時代では、我々の精神的生の實在的な根源とみら

れ、宗教的色彩が濃厚となっている。これは有限者における無限者の現在というロマンティックの思想と通じる。しかしフイヒテは、それを芸術的な或は宗教的な直観に求めず、どこまでも活動的行為的な生のうちに認める」(一一九—二〇頁)として、直観ではなく活動を通して「絶対者の根源的生」への「参入合」について「フイヒテによれば、経験の世界も結局は、特定の仕方において関連する自我の行為(それは経験の制約として先験的である)の系列によって成り立つ。そこで哲学にとって、現実的意識の先験的な発生、即ちその『演繹』が問題となる」(一一八頁)という。

(10) Fichte, J. G.: *Zweite Einleitung in die Wissenschaftslehre*, 1797. フイヒテによると、理念としての自我は一方で「理性の努力の究極目標」でありつつも他方で「単なる理念」にすぎない(GA IV/4, 266)。

(11) フイヒテのイエーナ期における自我の概念に焦点を当てて現代的問題を考察した論稿としては、中川明才氏による次の二論文を参照。中川明才「フイヒテの実践哲学における『道德的自然』」、『理想』第六九七号、理想社、二〇一六年、四三—五四頁、および「自我という思想——フイヒテの『道德論の体系』における隠されたもの——」、『フイヒテ研究』第二五号、日本フイヒテ協会、二〇一七年、一五—二八頁。

(12) 三宅は、フイヒテ晩年の『学者の使命に関する五回の講義』(一八一一年)を例に挙げている。Fichte, J. G.: *Fünf Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten*, 1811.

(13) これについてフイヒテは『学者の本質と自由の領域におけ

るその諸現象について』(1805年)において「すべての哲学的認識はその本性上、事実的ではなくて、むしろ発生的であり(nicht faktisch, sondern genetisch)、何らかの或る静止的存在を捉えるのではなく、むしろこの存在をその生命の根源から内面的に産出し構成するものである」(GA IV/8, 67)という。Fichte, J. G.: *Über das Wesen des Gelehrten, und seine Erscheinungen im Gebiete der Freiheit*, 1805, なお一八〇六年の

宗教論「幸いなる生への導き」においてフイヒテは、推論による証明という方法を通して誤謬を斥けて真理を取り出す学問的講義に対して、通俗的講義は直接的に各人の自然的な真理感覚に訴えるものであるとしている。即ち、通俗的講義は「純粹にかつ單純に真理を語り、誤謬に対してあるような審理では決してなく、自らの内にある真理以外のものを語らないのである」(GA IV/9, 72)と。このフイヒテの宗教論における論点については、橋智朗「存在の二重の現在——フイヒテとヨハネ——」、『フイヒテ研究』第25号、日本フイヒテ協会、二〇一七年、六—頁を参照。Fichte, J. G.: *Die Anweisung zum seligen Leben oder auch die Religionslehre*, 1806.

(14) 三宅によると「フイヒテにあつては真理の内容そのもの」が「実存的」なので、「哲学はつねに生そのものに於ける自由による自己決定と相關的なもの」であるが、フイヒテは「自分のうちに論理的思惟と、生を通しての真理の体得との互いに規定し合う二つの要求」をもっており、「この内容と形式とが十分融合していない」とする(『把握』一五五頁)。

(15) 三宅は、「絶対の統一としての根本實在を Licht [光] 又は Leben – göttliches Leben [神的な生] と呼んだ一八〇四年の

『知識学』第二講義を基に、初期知識学は「知識と行動に対する制約を求めて自我の必然的 *Handlung* に遡った」が、後期知識学は「むしろ最高制約原理たる絶対から出発して、それが経験意識の事実に至るまで発現し行く過程を下降的に示さうとする」と区別し、この知識学が「すべてその以後の基礎となる」とする（『把握』五九頁）。Vgl. Fichte, J. G.: *Die Wissenschaftslehre Zweiter Vortrag im Jahre 1804 vom 16. April bis 8. Juni*, PhB, 284, 1986, S. 82f.

(16) Fichte, J. G.: *Wissenschaftslehre nova method*, 1798/99.

(17) なお、この書簡には一八〇〇年十月八日付の草稿（GA III/4, 404-5）があり、「良心は本体（或いは神）としての叡智的なものから。単に良心の低次の極にすぎない感情は感覚的なもののうちにおける叡智的なものの発露から。このことから、全く対置される二つの新しい哲学部門が与えられるが、この両部門は両者の中間点としての超越論的觀念論において統一されている」とされ、『人間の使命』第三章に「示唆（*Winkel*）」があるとされた。この草稿は記された日付よりも「むしろ十二月二七日頃」に書かれたとみるほうが内容的に適切であるとアカデミー版全集において考えられている（GA III/4, 404）。

(18) Jacobi, F. H.: *im Druck veröffentlichter Brief von Friedrich Heinrich Jacobi an Fichte vom 3. - 21. 3. 1799.* のヤコービの書簡の内容について、より詳しくは拙論「なぜフイヒテのイエーナ期哲学はヤコービにニヒリズムとみなされたのか」、「フイヒテ研究」第二五号、日本フイヒテ協会、二〇一七年、七一―八五頁を参照。

(19) GA III/3, 234.

(20) ヤコービは「私は真なるものということで、知の以前に、かつ知の外部にあるものをことを了解している。それこそが、知に、理性という知の能力に価値を初めて与えるものである」（GA III/3, 239）という。

(21) 三宅は「*Wissenschaftslehre* が中心的に考へているところの道徳的実践の自我の動的な在り方の直観としての知も *Bild* か。その点不明」と括弧書きする（『把握』一六五頁）。

(22) Leibniz, G. W.: *Monadologie*, 1714, 1720, 8. 47. 一七一四年に仏語で書かれた無表題の原稿に「モナドロジー」の題名がつけられたのは一七二〇年の独語訳からである。ここにおいては「したがって神だけが、すべての想像されたモナドがそこから生み出された最初あるいは原初のモナドであり、これらはいわば、神性の途切れることのない光線あるいは放射（*die ununterbrochenen Strahlen oder fulgurations der Gottheit*）」によって、ある瞬間から次の瞬間まで、その本質上制限されている被造物の特性ある能力に比例して生み出される」とあり、三宅がフイヒテの『使命』において注目する「光線」[*Strahlen*]の語が用いられている。なお「モナドロジー」第四七節の理解については、根無一信「ライプニッツの創世記——自発と依存の形而上学」、慶応義塾大学出版会、二〇一七年、九六―九九頁を参照した。

(23) Fichte, J. G.: *Aphorismen über Religion und Deismus*, 1790.

(24) 美濃部仁「実在性の拠り所としての良心と良心を超える立場——1800年前後のフイヒテ——」、「理想」第六九七号、理想社、二〇一六年、六一―六三頁。

(25) 美濃部仁、同論文、六四頁。

(26) 「フイヒテにはじまるドイツ觀念論の形而上学と、ドイツ

神秘主義とりわけマイスター・エックハルトの教説」との關係については、ドイツ語圏においては多くの哲学者が注目してきた。大峯顕「知的直観と神秘主義」上田閑照編『増補版・ドイツ神秘主義研究』、創文社、一九八二年、五五九～六〇一頁を参照。

(27) 隈元氏によると、三宅が『把握』においてフィヒテ哲学に向けた鋭い批判は、むしろフィヒテ哲学のもつ長所を浮き彫りにするものである。即ち「フィヒテが人間の精神性を重視して、自然を軽視ないしこれを眼中におかなかったことは、従来あまねく非難的であった。しかし三宅は一面これに賛同しつつも、フィヒテ自身はひたすら自己の内面に眼を向け、一切をそこに収斂したと弁護する。筆者としては、フィヒテが自然を軽視し、その生の把握が英知的にすぎるとするのはフィヒテの欠点ではなくて、むしろ長所であって、彼はこの方向にもっと徹底すべきではなかったかとさえ考える」と。隈元忠敬「書評・三宅剛一著『ドイツ観念論における人間存在の把握』（酒井潔・中川明博編）」「ヘーゲル學報——西洋近現代哲学研究」第七號、京都ヘーゲル讀書會、二〇二〇年、一二七頁を参照。なおフィヒテ自身は、晩年の一八一二年ベルリン大学講義『知識学』において、自分の哲学がニヒリズムであると批判された理由について、「要は反省してはならないのである。知識学の反省するということ（das Reflektieren）が彼らの想定するニヒリズムの根柢なのである。知識学は反省の体系（ein Reflektionsystem）と呼ばれていた」（SW X, 325）と云ふ。

参考文献

- Leibniz, G. W.: *Lehr-Sätze über die Monadologie, ingleichen von Gott und seiner Existenz, seinen Eigenschaften und von der Seele des Menschen etc. wie auch Dessen letzte Verteidigung seines Systematis Harmoniae praestabilitae wider die Einwürffe des Herrn Boyle*. Aus dem Französischen übersetzt von Heinrich Köhler. Meyers sel. Witwe Buchhandlung in Jena, Frankfurt und Leipzig, 1720.
- Kant, I.: *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, 1785.
- : *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788.
 - : *Metaphysik der Sitten*, 1797.
- Fichte, J. G.: *Aphorismen über Religion und Deismus*, 1790.
- : *Grundzüge der gesamten Wissenschaftslehre*, 1794/95.
 - : *Das System der Sittenlehre nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre*, 1798.
 - : *Erste Einleitung in die Wissenschaftslehre*, 1797.
 - : *Zweite Einleitung in die Wissenschaftslehre*, 1797.
 - : *Über den Grund unseres Glaubens an eine göttliche Weltregierung*, 1798.
 - : *Wissenschaftslehre nova method*, 1798/99.
 - : *Die Bestimmung des Menschen*, 1800.
 - : *Die Wissenschaftslehre Zweiter Vortrag im Jahre 1804 vom 16. April bis 8. Juni*, Pab. 284, 1986.
 - : *Über das Wesen des Gelehrten, und seine Erscheinungen im Gebiete der Freiheit*, 1805.
 - : *Die Anweisung zum seligen Leben oder auch die*

Religionslehre, 1806.

——『*Fünf Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten*, 1811.
——: *Die Wissenschaftslehre*, Vorgelesen im Jahre 1812.

Forberg, F. K.: *Über die Entwicklung des Begriffs Religion*, 1798.

Jacobi, F. H.: *im Druck veröffentlichter Brief von Friedrich Heinrich Jacobi an Fichte vom 3. -21. 3. 1799.*

Hegel, G. W. F.: *Phänomenologie des Geistes*, 1807.

Hegel, G. W. F.: *Vorlesungen über die Philosophie der Metaphysik*, Berlin 1827/23.

Helmsoth, H.: *Fichte, Geschichte der Philosophie in Einzeldarstellungen*, Abt. 7. Die Philosophie der neueren Zeit; Bd. 29, 1923.

Nietzsche, F.: *Wille zur macht*, Aus dem Nachlass der Achtzigerjahre.

三宅剛一『人間存在論』、勁草書房、一九六六年

——『道徳の哲学』、岩波書店、一九六九年

——『芸術論の試み』、岩波書店、一九七三年

——『学の形成と自然的世界』、みすず書房、一九七三年

——(酒井潔編)『人間存在論の哲学』京都哲学撰書第二三巻、燈影舎、二〇〇二年

——(酒井潔・中川明博編)『ドイツ観念論に於ける人間存在の把握』、学習院大学研究叢書三六、学習院大学、二〇〇六年

酒井潔『三宅剛一』、『比較思想研究』第二三号、比較思想学会、北樹出版、一九九七年、二一～三二頁

——『三宅剛一のフイヒテ講義』、『フイヒテ研究』第十六号、日本フイヒテ協会、見洋書房、二〇〇八年、二〇～三六頁

——「西田幾多郎と三宅剛一——『歴史』ということをめぐる——」、『西田哲学会年報』第五号、西田哲学会、二〇〇八年、二一～四三頁

隈元忠敬『フイヒテ』『全知識学の基礎』の研究』、溪水社、一九八六年

——書評「三宅剛一著(酒井潔・中川明博編)『ドイツ観念論に於ける人間存在の把握』、『ヘーゲル學報』第七號、京都ヘーゲル讀書會、二〇二〇年、一八～二八頁

湯浅正彦書評「三宅剛一著(酒井潔・中川明博編)『ドイツ観念論に於ける人間存在の把握』」、『フイヒテ研究』第十五号、日本フイヒテ協会、見洋書房、二〇〇七年、一一九～一二五頁

上田閑照編『増補版・ドイツ神秘主義研究』、創文社、一九八二年

佐々木達彦『フイヒテ初期道徳論における良心』、『倫理学研究』第四七号、関西倫理学会、見洋書房、二〇一七年、一一二～一二三頁

下村寅太郎『エッセ・ビオグラフィック』、『下村寅太郎著作集』第十三巻、みすず書房、一九九九年

橘智朗『存在の二重の現存在——フイヒテとヨハネ——』、『フイヒテ研究』第二五号、日本フイヒテ協会、見洋書房、二〇一七年、六〇～七〇頁

玉田龍太郎『なぜフイヒテのイエーナ期哲学はヤコビにニヒリズムとみなされたのか』、『フイヒテ研究』第二五号、日本フイヒテ協会、見洋書房、二〇一七年、七一～八五頁

——『三宅剛一の人間存在論とフイヒテの道徳衝動論』、『比較思想研究』第四八号、比較思想学会、北樹出版、二〇二二

年、六八～七五頁

中川明才「無神論論争期における超越論哲学と宗教」、『フイヒテ研究』第十五号、日本フイヒテ協会、晃洋書房、二〇〇七年、六九～八二頁

——『フイヒテの実践哲学における『道徳的自然』、『理想』第六九七号、理想社、二〇一六年、四三～五四頁

——「自我という思想——フイヒテの『道徳論の体系』における隠されたもの——」、『フイヒテ研究』第二五号、日本フイヒテ協会、晃洋書房、二〇一七年、一五～二八頁

中川明博「三宅剛一差出・田辺元宛書簡」、『人文』第九号、学習院大学人文科学研究所、二〇一一年、七三～九六頁

根無一信『ライブニッツの創世記——自発と依存の形而上学』、慶応義塾大学出版会、二〇一七年

美濃部仁「實在性の拠り所としての良心と良心を超える立場——1900年前後のフイヒテ——」、『理想』第六九七号、理想社、二〇一六年、五五～六七頁

フリードリッヒ・ニーチェ（原佑訳）『権力への意志』上・下、ニーチェ全集12・13、ちくま学芸文庫、一九九三年

※当研究に際しては、三宅剛一御子息で明治大学名誉教授の三宅正樹先生に多くの御助言を賜った。またライブニッツ哲学の理解に際しては、大阪経済大学准教授の稲岡大志氏より資料提供の御世話になった。衷心より感謝申し上げます。